(東女医大誌　第34巻　第3号
頁134—135　昭和39年3月)

〔学　　会〕

東京女子医科大学々会　第123回例会

日　　時　昭和39年1月24日（金）午後2時より
場　　所　東京女子医科大学　本部講堂

1. 小児糖尿病の1例

（小児科）白井　桂子

成人の糖尿病ならびに欧米諸国の小児糖尿病に比して，本邦の例は甚だ少ない．小児の糖尿病の治癒したと思われる例を経験した．

症例は7才男児．初診昭和38年1月28日．家族歴：母方の伯父に糖尿死亡者が有る他は異常なし．既往歴：麻疹，耳下腺炎，大腸カタル，鼠蹊ヘルニヤ．ツ反応は疑陽性．

現病歴：1カ月程前より多尿，頻尿，削瘦，口渇，陰部掻痒感などにて，尿糖を発見さる．入院時所見：全身状態異常なし．空腹時血糖 185mg/dl，尿糖強陽性，血清化学的検査正常，眼底に異常なし．ＥＫＧは正常であつた．坂口食による糖負荷試験も陽性で真性糖尿病と診断した．

中山氏糖尿制限食をとらせ，同時にＮＰＨインシュリンを使用．3週間後に尿糖陰性となり，血糖正常範囲となり，初診時の主訴も治まり退院す．その後1年間，糖尿の再発をみない．

2. 巨大虫垂粘液嚢腫の1例

（外科）
太田八重子・藤倉　一郎・○和田　　汪

虫垂粘液嚢腫は卵巣嚢腫と共に腹膜仮性粘液腫の発生母地として重視されているが，稀な疾患に属する．

私達が最近経験した巨大な虫垂粘液嚢腫の症例を述べ，文献的に本症の発生機転，合併症としての腹膜仮性粘液腫，および予後について述べた．

症　例

患者は38才の男子で，小児期に右下腹部痛の既往歴があり，入院3日前より心窩部痛あり，入院前日より回盲部痛となり，急性虫垂炎の診断で手術を行なつたものである．

入院時の腹部所見としては回盲部の圧痛，軽度の筋性防禦が認められ，また境界および表面の性状の明確でない腫瘤を触れている．

手術所見では，虫垂は5×5×17cmの大きさで，盲腸より上行結腸の側壁に癒着していた．内腔には 180gの mucus を充たし，虫垂根部で殆んど閉鎖していた．

病理所見では，内容は mucus で，虫垂壁は筋肥厚を伴い，嚢腫内面の上皮細胞は殆んど消失し，壁全層にわたつて強度の炎症を併発していた．

考　察

1)　発生機転

炎症性変化のあとに虫垂根部に瘢痕狭窄，閉塞を起こし，膿汁貯溜が永続し，その間に細菌は死滅して，分泌される粘液が中にたまり粘液嚢腫を形成すると考えられる．

2)　腹膜仮性粘液嚢腫との相関

虫垂粘液嚢腫の穿孔により，腹腔内に mucus が漏出すると共に，その上皮細胞が腫瘍性を有していて成立すると考えられる．

3)　予後

腹腔内穿孔前に発見摘出されれば良好であるが，腹膜仮性粘液腫を形成したものは不幸な転機を取る事が多い．

結　語

虫垂炎の診断で偶然手術時に発見された巨大な虫垂粘液嚢腫の症例について報告した．

3. ラット胸腺細胞の好気的解糖に対するX線照射の影響

（生化学）荒木　仁子

in vitro での約70レントゲンのX線照射で，ラット胸腺細胞浮遊液の37℃2時間温置後の乳酸生成量は2倍になる．18レントゲンですでに乳酸の有意の増加を認める．1000レントゲン照射の場合，乳酸の増量は温置後1時間以内に認められ，2ないし4時間の温置ではさらに